

1) 分科会 A 「日本語指導の心がけ」～初心者が意識することは何か～

分科会 A

◎自己紹介

言葉が通じていない、通じているかどうか分からない生徒にどう伝えればいいのか、コミュニケーションの難しさ、在県卒の生徒がどの程度理解できているのか把握することの難しさ、在県卒の生徒の中でも能力の違いがあるなど、それぞれ感じている。

◎発表

「やさしい日本語」で情報を提供するということ 永谷先生（相模女子大学）

日本語を母語としない人とコミュニケーションをとる場合、「何語で話せばいい?」「英語苦手なんだけど」「日本語使ってもいい?」と不安になる。

相手の母語で話すのは難しい。

日本語の上達を待つ。

共通語で話すのがよいが、それは英語か? 日本語の方が伝わる可能性がある。

→日本語をやさしくする。日本語を日本語に翻訳する。「やさしい日本語」が橋渡しになる。

「やさしい日本語」の歴史。1995年阪神淡路大震災で、緊急時の情報が伝わらない。公的サービスにおける情報提供。

(参考) 弘前大学社会言語学研究室の「やさしい日本語」作成のためのガイドライン。

例) 難しい言葉を避け、簡単な語を使う。文を短くする。文末表現は統一する。

二重否定を避ける。あいまいな表現を避ける。外来語は注意する。

「やんしす」(日日翻訳ソフトウェア)

「リーディングチュウ太」(日本語の語彙のレベルがわかる)

「やさしい日本語アプリ」(やさしい日本語の会話例を紹介)

実際に、一文一情報、一動詞で日本語をやさしい日本語に翻訳する。

受け入れ側が歩み寄るが、学習者も「やさしい日本語」を理解するために学習する必要がある。

◎ワークショップ

学校で「やさしい日本語」を使ってみよう 藤井先生・佐屋先生 (CEMLA 講師)

(注意) 教員は話で理解させようとしゃべりすぎる。焦って早口になる。

男言葉・女言葉が入りにくい「です・ます」で話す。接続詞、擬態語、擬声語は使わない。例や選択肢は二つまで。分かってないのに「分かった」というので、最後に確認する。

小集団に分かれて、それぞれのシチュエーションでどう伝えればいいのかグループ討議を行う。実際にシミュレーションし、その後、難しかったところ、悩んだところなどを復習する。

## 2) 分科会 B 「多文化共生社会の縮図を目指して」

～CEMLA と共に歩んだ相模原青陵高校の 7 年～

発表 相模原青陵高校 吉川圭子教諭

◎発表の目的：新磯高校から相模原青陵高校に引き継がれた CEMLA 事業を、弥栄高校と再編統合によってできる新校に引き継ぐために、歴史をまとめ、課題等を整理したい。

### ◎成り立ち

- 2007：新磯高校が研究校に指定
- 2008：学校設定科目の設定 相模女子大との連携・調整
- 2009：相模女子大学に CEMLA ルームがオープン
- 2010：相模原青陵高校開校 在県卒業生定員 5 名
- 2011：在県卒業生定員 10 名

### ◎JSL 生徒への配慮・取り組み

- ・クラス編成の工夫、プリントのルビの徹底
- ・学校設定科目の拡大
- ・多文化交流部の創設
- ・多文化コーディネーターの存在が大きい

### ◎問題点

- ・教員の代休の取得の難しさ
- ・JSL 生徒が学校文化を知らない

### ◎やりがい

- ・生徒たちの進路の実現
- ・他者と連携していくこと
- ・国際教育研究発表大会 全国大会奨励賞受賞

### ◎まとめ

- ・チームワークが大切である。
- ・学年全体としてコンセンサスを明確にしていく。
- ・できるだけ多くの教員が JSL 生徒のクラス担任をする。
- ・教科担当者はまめにクラス担任に連絡する。
- ・カウンセラーや SSW との連携も重要である。
- ・JSL 生徒を特別扱いしないことも大事である。学校生活や勉強では生徒同士が助け合い、高め合っていくことが、多文化共生社会につながっていくのではないかと。

### 3) 分科会 C 「JSL 生徒の大学進学」～大学での現状・課題・取り組み～

発表 上智大学短期大学部 宮崎幸江教授

#### ◎大学における外国につながる学生への対応

基礎ゼミナール多文化クラス（仮称）の設置の背景と方法を通して

- ・多様な入試制度により一定の学生が毎年入学している。
- ・退学者や進路未決定者が目立つ現状に、学生の言語文化的背景の把握を要する。
- ・12年度より多文化学生の実態を調査している。

必要な支援として

- ・バイリンガル・マルチリンガルを目指した進路目標を立てさせる。
- ・人とは異なる経験や「個性」をアピールする力を引き出す。
- ・全教員が多文化学生存在を認識し支援する姿勢を推進する。

まとめ

入学する学生の多文化性と、その後のキャリアアップにつながる支援体制の必要性が求められる。

発表 桜美林大学 齋藤伸子教授 古川健二さん

#### ◎「桜美林大学の取り組みについて」

桜美林大学の入試・就職について

- ・入試 AOにおいて帰国生徒対象の選考枠がある。
- ・就職 留学生専用のキャリア関係授業や合同企業説明会  
個別支援（カウンセリング・相談）  
留学生積極採用企業との連携

桜美林大学の日本語学習と支援を中心に

- ・アカデミックレベルの日本語の習得を目的とした「日本語専門基礎」
- ・個別の目標と計画に基づく学習の実施  
「授業外の支援」  
「自分の強みを発見し、発揮する」

#### 4) 分科会 D 「JSL 生徒保護者の思い」～日本での子育ての戸惑いと支援～

ゲストスピーカー 日本での子育てを経験した外国出身の方 3 名（台湾・ネパール・中国出身）

##### ◎それぞれの出身の国と日本の教育制度の比較

- ・自分の国よりも日本の学校のほうが、優しい先生が多い。ただ生徒のやる気や授業態度が緩んでいる気がした。
- ・高校進学・大学進学の仕組みが違い、戸惑うことが多かった。

##### ◎日本の学校（小学校～高校）での大変だったこと

- ・学校からの通知が理解できなくて大変だった。またその枚数もとても多い。文章も外国出身には理解しづらい。
- ・大変なのはわかるが、通知を翻訳してくれるサービスやよみがなふりをお願いしたい。
- ・部活動が自分の国とはだいぶ違う。自分が出場しないのに、先輩の応援のために試合に行くのが最初は理解できなかった。また、あまりに部活の練習が多すぎる。ただ、子どもは部活によって日本語が上手になり、日本人の友人もできてとてもよかった。

##### ◎日本の学校（小学校～高校）での支援

- ・学校からの通知をわかりやすくする試みはいろいろな形で模索されている。横浜のあーすぷらざの翻訳した通知文章を紹介するサービスや、メールを使った翻訳サービスなどもできつつある。
- ・取り出しの授業や中学校での国際教室はとても助かった。さまざまな生徒がいるので、生徒の実力に応じて対応してくれるのはよかった。



